古府しのまち遺跡

団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書

1995年3月

石川県小松市教育委員会

例　言

1．本書は、石川県小松市古府町地内に所在する古府しのまち遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、小松市板津土地改良区施行の団体営土地改良総合整備事業に係るもので、昭和63年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が実施したものである。

3．本遺跡の調査期間、調査面積及び調査担当者は次の通りである。

昭和63年７月12日～８月５日　　360㎡

小松市教育委員会埋蔵文化財調査室調査員　石田和彦が担当した。

4．本書の編集と執筆は、第１章については「古府しのまち遺跡発掘調査報告」（浜崎悟司、1991、石川県立埋蔵文化センター）第１章　位置と環境を転載、その他を石田が担当し、市教委埋蔵文化財調査室職員から協力を得た。

5．出土品・記録資料は、市教委埋蔵文化財調査室にて一括保管している。

6．本書を編集・執筆するにあたり、浜崎氏（現在社団法人石川県埋蔵文化財保存協会）には第１章の転載を快諾いただき、また、緑釉土器については、尾野善裕氏（名古屋市見晴台考古資料館）に有益なご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

目　次

第1章　位置と環境……3

第2章　調査に至る経緯と経過……5

第3章　調査の結果……7
　第1節　遺構の検出状況……7
　第2節　遺構及び遺物……7

第4章　まとめ……15

図版目次

図版一　遺跡
　(1)調査前の状況
　(2)竪穴状遺構
図版二　遺跡
　(3)1号落込み状遺構
　(4)1号土坑
図版三　遺跡
　(5)2号土坑
　(6)3号土坑
図版四　遺跡
　(7)4号土坑
　(8)5号土坑
図版五　遺物
図版六　遺物
図版七　遺物
図版八　遺物
図版九　遺物

挿図目次

第1図　遺跡の位置 …… 3
第2図　調査箇所と周辺の遺跡 …… 4
第3図　調査区の位置 …… 6
第4図　遺構配置図 …… 8
第5図　溝状遺構実測図 …… 9
第6図　竪穴状遺構実測図 ……10
第7図　1号落込み実測図 ……10
第8図　2号土坑実測図 ……11
第9図　3号土坑実測図 ……12
第10図　4号土坑実測図 ……12
第11図　5号土坑実測図 ……13
第12図　構状遺構出土遺物実測図 ……16
第13図　遺構出土遺物実測図 ……17
第14図　包含層出土遺物実測図① ……18
第15図　包含層出土遺物実測図② ……19
第16図　包含層出土遺物実測図③ ……20

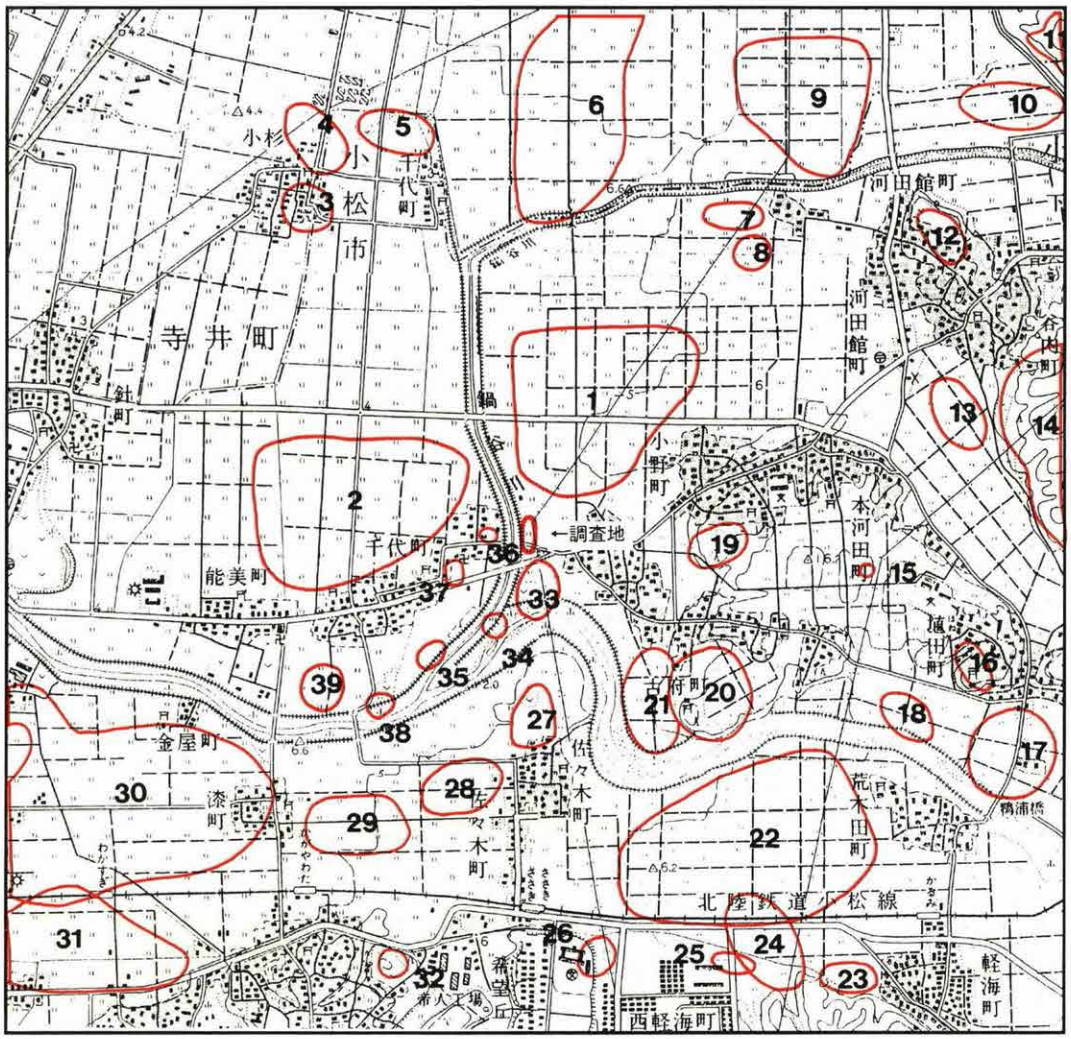
第1章　位置と環境

第1図　遺跡の位置

古府しのまち遺跡は、石川県南西部に位置する県内第２位の都市小松市の北東端近く、古府町集落の北西にひろがる遺跡である。遺跡は、辰口町南部の給料地帯に源を発した鍋谷川がその流路を西から南へ90°変える内角部分に位置している。鍋谷川は、小松市北部を流れる県内第２位の河川梯川の支流の一つである。手取川扇状地の南の扇端部にあたる寺井町南東部及び能美丘陵北部地域の地表水を集めながら平野部を進み、小松市千代町と佐々木町集落の間で本流に注いでいる。遺跡は海岸の河口から梯川・鍋谷川を8km余り遡った地点に所在しているが、あたりは標高4mをきる低地であり、まとまった降雨があれば一面に冠水することもしばしばである。西方に向かっては、海岸の砂丘にいたるまでの間を梯川系の河川運搬物が埋積した、概して起伏に乏しい低平な平野がひろがる。一方、遺跡の東方は、標高15m前後の洪積台地である通称古府台地を介して背後には能美丘陵が控える。梯川の中・下流においては、平常は流れが遅緩であることから、米・炭・石材などの物資を運び出すための舟が昭和初期には河口から10km余り上流の中海町付近まで遡上していたと伝えられ、古来梯川が交通の幹線としての側面をもっていたことも当地域の歴史を考えるうえで看過されてはならないであろう。

さて、当地周辺における縄文時代の遺跡としては、鍋谷川北岸にあたる寺井町牛島ウハシ遺跡縁辺で前期の、古府台地上の南野台遺跡・鍋谷川沿いの横地遺跡でそれぞれ中期・後期の遺物の出土が伝えられ、千代町地内で晩期～弥生時代初頭にかけての遺物が検出されているが、これら縄文時代以前の状況については遺物の散発的な出土にとどまっている部分が大きく、今後の調査の進展によってより明らかにされていくものと見られる。弥生時代中期の遺跡は、梯川下流域で検出されている。八日市地方・梯川鉄橋・白江梯川などの遺跡である。特に、八日市地方遺跡から検出された土器は北陸の弥生時代中期中頃の標式である「小松式」土器として知られる。

弥生時代も終わりに近い頃、本遺跡西方には数多くの集落が成立していたものと見られる。梯川中流域の漆町・念仏寺塔・千代・白江梯川あるいは吉竹・高堂等発掘調査された大半の遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が大量に見つかっている。これらの遺跡はここ10数年来調査されたもので、その成果は整理途上のものが多いが、漆町遺跡から見つかった大量の土器群をも



第2図　調査箇所と周辺の遺跡(1/2,500)

1. 古府しのまち(弥生～古墳、平安)
2. 千代オオキダ(古墳～中世)
3. 千代デジロB(縄文～中世)
4. 千代デジロA(縄文～中世)
5. 千代デジロC(縄文～中世)
6. 牛島ウハシ(古墳、奈良～平安)
7. 8. 下出地割
9. 佐野八反田(奈良～平安)
10. 河田向山下(縄文、平安)
11. 向山古墳群
12. 河田館跡(縄文～中世)
13. 河田C
14. 河田山古墳群
15. 前田利常公灰塚
16. 宮谷寺屋敷(縄文、室町)
17. 埴田(奈良～平安)
18. 埴田ウラムキ(古墳～中世)
19. 十九堂山(平安、中世)
20. 南野台(縄文、古墳)
21. 古府シマ(中世)
22. 荒木田(古墳、平安～中世)
23. 西芳寺跡(縄文～中世)
24. 軽海中世墓群
25. 亀山玉造(古墳)
26. 大谷口(弥生)
27. 佐々木アサバタケ(弥生～中世)
28. 佐々木ノテウラ(弥生～中世)
29. 佐々木(平安)
30. 漆町(弥生～中世)
31. 打越(古墳～中世)
32. 八幡遺跡(縄文～近世)
33. 古府(平安～中世)
34. フドンド(平安)
35. 横地(縄文)
36. 小野町(古墳)
37. 千代城跡(室町)
38. 本村(古墳)
39. 千代マエダ(古墳、平安)

とに提唱された「白江式」土器が北陸における当該期の土器編年の枠組みを構成する上で大いに注目を集めたのを初め、豊富な内容は集落の実体を明らかにするうえで貴重な資料を提供するものと期待されている。これらの遺跡群は古墳時代前期にかけて降盛期を迎え、周辺の古墳群の造営にかかわっていったものとみられるが、6世紀以降急激にその規模を減じ、9世紀にいたるまで全体に低調な状況が続く。この状況は洪水と長期的な滞水状態を想定させるものであるが、その検証は未だ十分ではない。またその間の集落の動向も明らかでないが、漆町遺跡の一部と佐々木ノテウラ遺跡等に時期的な空白を部分的に埋める資料がある。

9世紀後半以降、本遺跡周辺では遺跡の数が再び増加する。発掘調査の行われたものでは、しのまち遺跡南方の古府遺跡・梯川対岸の佐々木ノテウラ遺跡があり、漆町遺跡でも該期以降再び降盛に向かったことが知られている。10世紀にはいると、当地周辺はさらに活況を呈する。特に、寺院関係の遺跡が目立ち、十九堂山遺跡（廃寺）・軽海廃寺が営まれたのはこのころと見られる。また、発掘調査によって大規模な遺構と多彩な遺物が発見された小松市八幡町浄水寺跡についてもこのころに堂宇の造営が本格化したものと考えられている。なお、10世紀には加賀国府は能美郡に置かれていたとされ、古府町旧国府地区はその有力な比定地でもある。

11世紀代に属する遺構・遺物は当地周辺では現状では少ないようである。

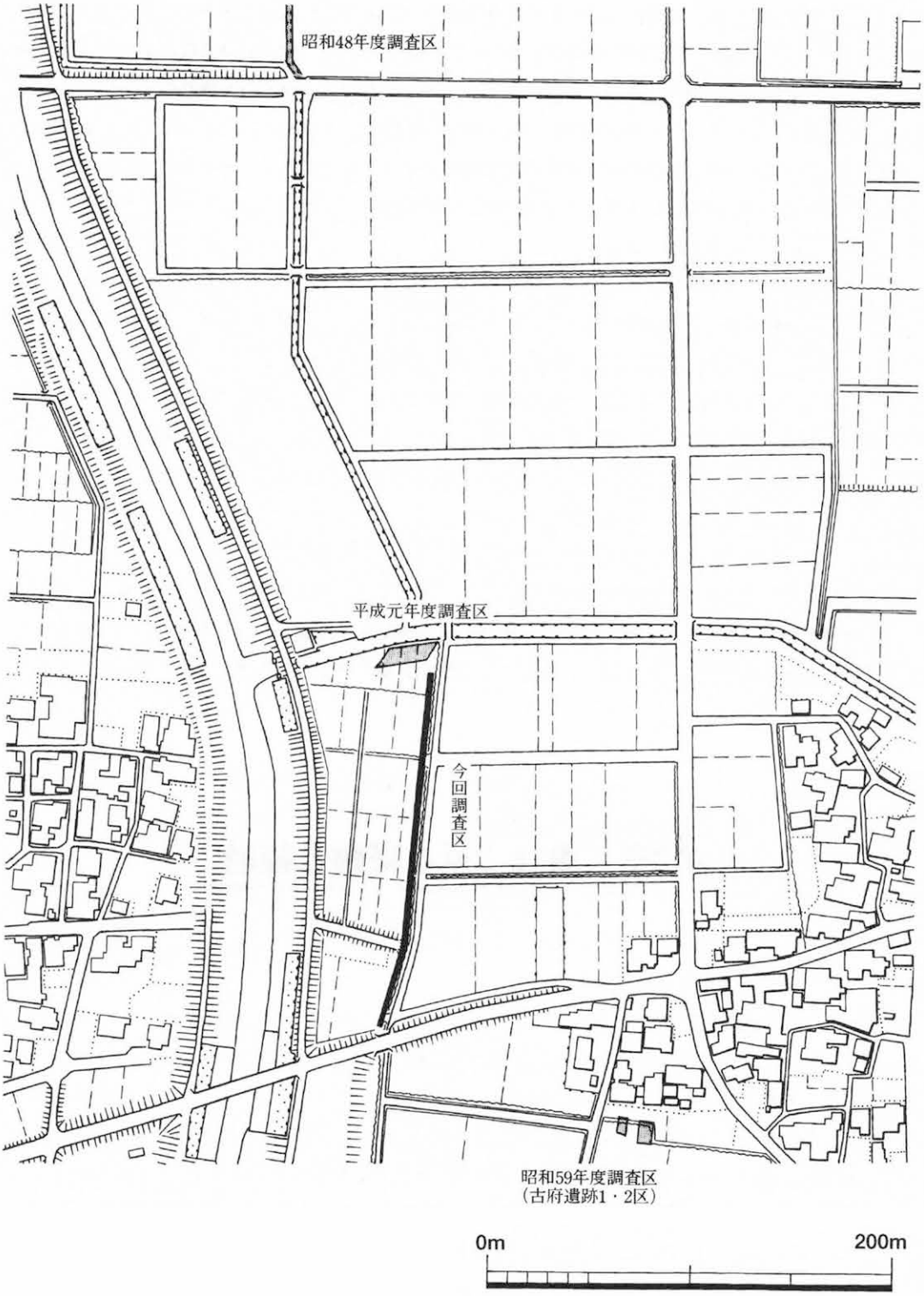
平安時代末～鎌倉時代には漆町遺跡で多くの遺構が検出されているのをはじめ、白江梯川遺跡での集落の再興が顕著になるなど、梯川中～下流域における再開発が進行していったものと見られる。このころの加賀国府は旧国府地区にあったものとして特に異論を見ない。本遺跡はその眼前に位置している。

第2章　調査に至る経緯と経過

古府しのまち遺跡の調査は、板津土地改良区が昭和63年度に実施する団体営土地改良総合整備事業に伴う緊急発掘調査によるものである。

昭和63年2月、試掘調査の依頼が小松市教育委員会へ提出された。工事面積1.8haのうち、田面に対する工事はすべて盛土によるものとされたため、排水溝予定の部分のみについて調査対象とし、同年3月21日に試掘調査を実施した。試掘坑は1×1mの規模で、1筆につき2ケ所、計8ケ所の掘り下げを行った。その結果、全ての試掘坑から遺物が検出され、遺構の存在を確認した箇所もあった。このため、板津土地改良区へは、計画排水路については発掘調査を実施する必要があると回答した。

昭和63年6月、小松市教育委員会に対し調査依頼が提出されたのを受けて、新規敷設排水路部分360㎡（幅2m,長さ180m）について、7月12日から8月5日にかけて発掘調査を実施した。作業は、耕作土及び遺物包含層を人力で地山面まで堀り下げ、遺構検出を行った。



第3図　調査区の位置

第3章　調査の結果

■第1節　遺構の検出状況

今回調査を実施した箇所は、鍋谷川にそって南北に伸びる工事予定区域のうち、鍋谷川へ合流する小野川で区切られた、南側部分の東縁に設けられる用水部分（幅２m、長さ約140m）に当たるところである。

耕地面の高さはほぼ同じレベルで、地山面までの深さも12cm前後となっている。調査区全体にわたり、耕地整理等でかなり土の移動や削平を受けていると思われる。そのため、耕土１層のみですぐ地山面が検出されるといった箇所がほとんどであった。また、遺構についても遺存状態は良好なものとは言えず、検出されたものも、調査区のうち北側約80mまでに限られており、その間も、東側部分の幅40cm前後については旧用水跡と思われる攪乱を受けている。

遺物についても、北端のA区がもっとも多量に出土し、南側へ進むにしたがって出土量が減少するといった状況である。遺構、遺物とも、調査区北端周辺が分布密度の高い地域と考えられる。

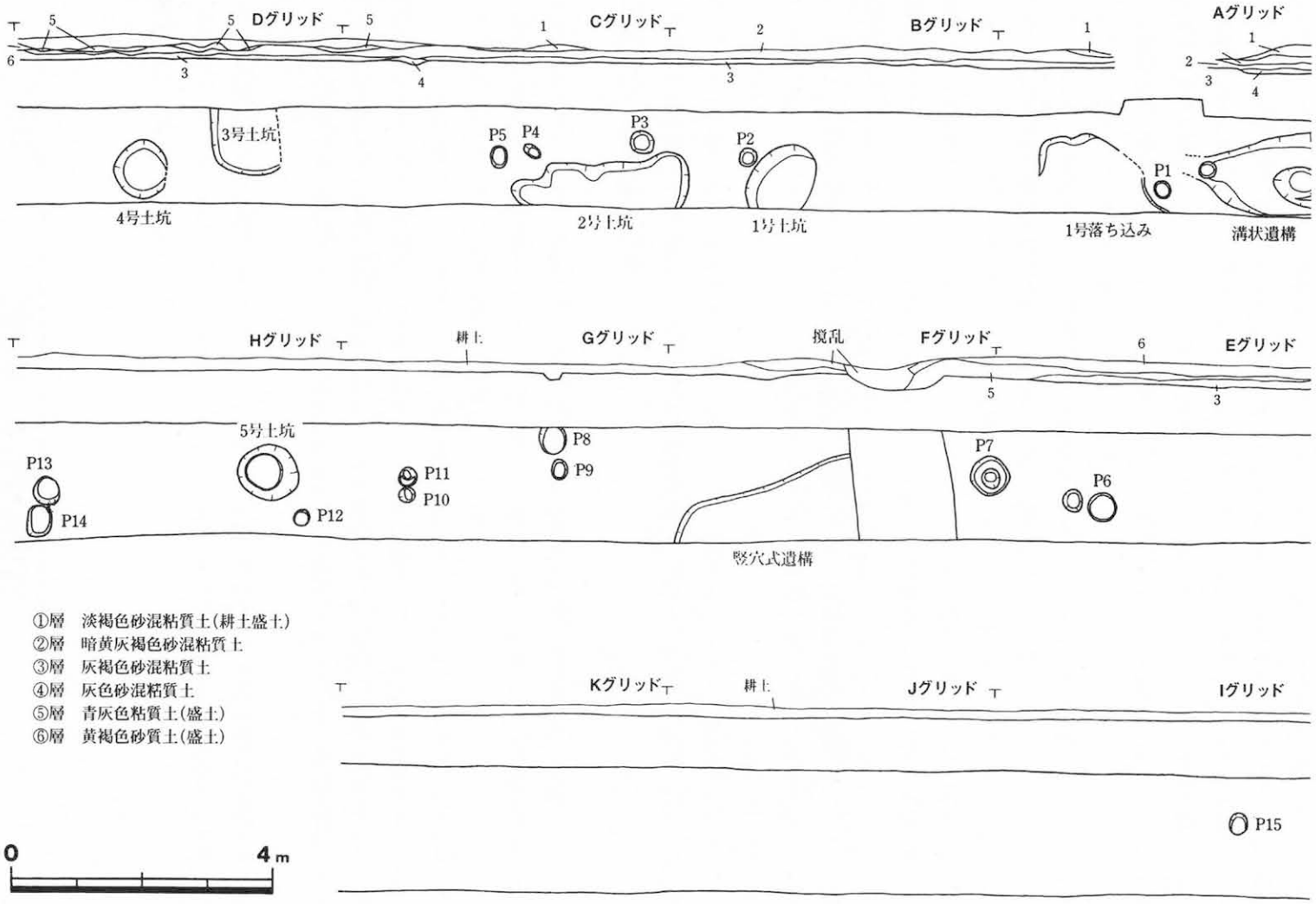
■第2節　遺構及び遺物

調査において検出された遺構は、溝状遺構１、落ち込み１、土坑６、竪穴状遺坑１、ピット13である。また出土遺物の量は、収納ケース（380×640×140）に３箱程度であった。鉄釘片１点以外はすべて土器類が占める。須恵器については、ほとんどが小松南部産とみられるが、辰口産と思われるものが３点確認できた。土師器については遺存状態がやや不良で、剥落や摩擦の激しいものも多く見られた。従って、図示した内容についても器面の調整が判然としないなど不確実部分もある。以下、各々の遺構について述べる。

溝状遺構(第5図)　Aグリッド北側で検出された。調査区境界では幅1.22mを計るが1.8m南では0.4mに狭まり、その先が攪乱を受けているため、溝として続いていくのか、途切れてしまっているのかは判別できない。深さは0.2m前後となっている。北側に土坑状の遺坑が、南側に柱穴状の遺坑が重複している。土坑状遺構は覆土が黒灰褐色で、土師器の小片が数点出土している。

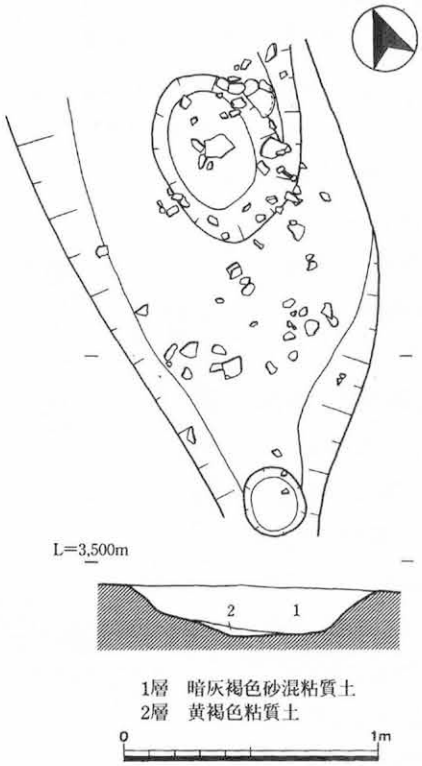
この遺構は、今回調査区のなかでもっとも土器の集中していた箇所で、土師器を中心に多量に出土した。内容を見ると、かなり年代にばらつきがみられる。

須恵器では、坏蓋、坏、皿、甕が見られる。坏蓋は３点出土した。１は宝珠形つまみ部分で、７世紀後半のものと見られる。２、３は８世紀初頭のもので、２は口径16.8cm、器高2.2cmに復元され、天井部に広い平坦面を持つ。焼成、胎土ともあまり良くなく、灰白色を呈する。３は口径推定15.2cmを測り、内外面ともに淡青灰色を呈する。焼成は良好だが、胎土に砂粒をやや多く含む。外面に緑色の釉がまばらにかかり、天井部外面には回転ヘラケズリ痕が見られる。４は坏で、底径推定9.0cmを



第4図　遺構配置図(S=1/100)

測る。焼成はややあまく灰白色を呈し、底部外面には回転ヘラ切り痕が見られる。8世紀末から9世紀初頭のものと思われる。5～7は台付坏で、8世紀後半から9世紀前半に属する。5は台径推定10.8cmで、高台の内端が接地し、端部の面を凹ませてある。6は台径推定8.2cmを測り、胎土には砂粒を含んでいる。内外面ともに淡青灰色を呈する。7は台径7.6cmを測り、胎土はキメが細かく滑らかである。8は5～7と同時期の皿で、幅の広いしっかりした台が貼り付けてある。内外面とも淡灰色を呈する。甕の胴部の破片も2点出土している。9は外面が灰色で平行叩き、内面が灰白色で同心円あて具痕がみられる。7世紀から8世紀にかけてのものと思われる。10は外面が黒灰色で平行叩き、内面が淡灰色で同心円あて具痕のち平行あて具痕が見られ、胴部の下方の破片と見られる。9世紀後半から10世紀前半に属する。



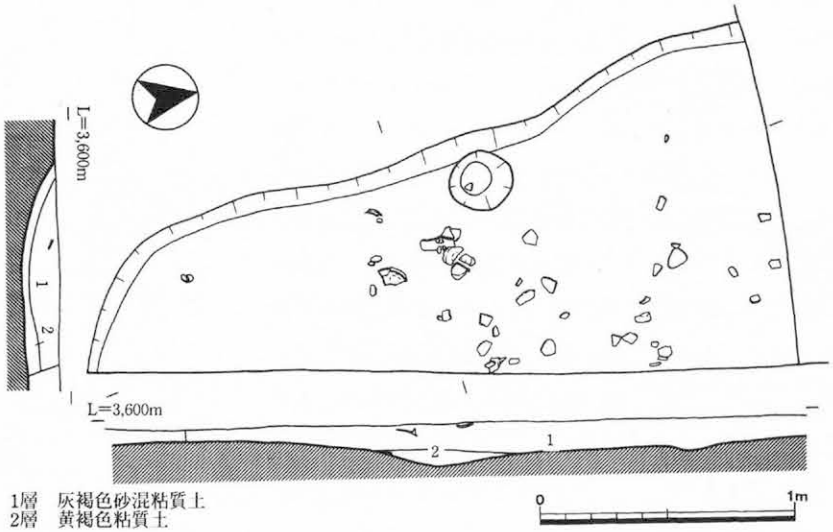
第5図　溝状遺構実測図(S=1/30)

土師器は、破片数では須恵器を大きく上回っているが、器形の判別が困難なような小片が大半で、剥落等の激しいものなどを除いたため、図化できたものは少ない。坏蓋、椀。高坏、甑、甕等が見られる。11は坏蓋で、口径推定15.0cmを測る。口縁端部折り返しは短く、断面が三角形状を呈する。残存部には内外面ともに全体に赤彩痕を認めることができる。8世紀後半に属する。12は有台椀で台部径推定7.5cmを測り、内外面ともに赤彩痕が認められる。9世紀のもと思われる。13は口縁部に沈線を持つ赤彩椀で口径推定17.0cmを測る。甕は2点見られる。14は口径17.2cmに復元され、有段口縁をもち、口縁帯外面に擬凹線が施され、同内面には指頭圧痕が見られる。15は古墳時代のもので、胴部の張りが小さく、頚部から下には内外面とも刷毛目調整が施されている。16は古墳時代中期の高坏の脚部の破片だが、剥落が激しく調整等は不明である。胎土に粗砂粒が目立つ。17は甑の把手部分のみの破片である。

竪穴状遺構(第6図)　Fグリッド南側で検出された。北側は幅1.6mで東西に横切る用水跡と思われる攪乱によって途切れており、東側は攪乱及び調査区域外によって明らかにならないために遺構全体の形態及び性格が特定できない。残存部でも径が2.8mを計り、規模の大きさから竪穴ではないかと推測する。深さは0.15mで、覆土は1層が灰褐色砂質粘土、2層が明黄褐色粘質土で、内部へ流れ込んだような状態で堆積している。

出土遺物の量は、溝状遺構に次いで多かった。

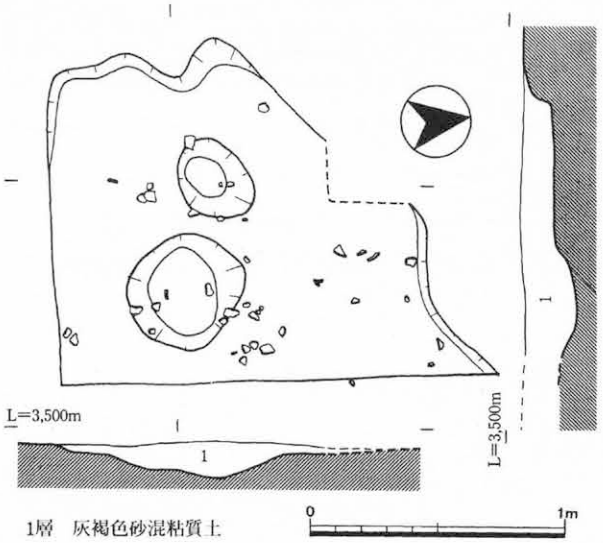
須恵器は、坏蓋、坏が見られる。18は8世紀代の坏蓋で、口径推定15.5cmを測る。天井部外面には回転ヘラケズリ痕が見られ、口縁端部は巻き込み気味に内屈させている。19は7世紀末から8世紀初頭にかけての坏蓋で、口径推定15.8cmを測り、扁平な宝珠形のつまみをもつ。天井部外面には回転ヘラケズリ痕が見られ、また、口縁端部は薄く折り返されている。坏では、20が口径14.2cmを測る。受け部には先端より1mm内側に重ね焼きの痕が線状に見られる。6世紀後半に属するものと思われる。21は7世紀末のもので、幅広い高台をもち、底部は外面ヘラケズリ痕、内面不整方向のナデが施されている。



第6図　竪穴状遺坑実測図(S=1/30)

他に、弥生時代末の特殊器台(22)や、土師器の高坏(23)等が見られた。

1号落ち込み状遺構(第7図)　Aグリッド南側から検出された。北側の一部分が攪乱によって、また、東側一面が攪乱及び調査区域外で途切れている。当初、土坑として掘り下げたが、不整形過ぎたため落



第7図　1号落ち込み状遺坑実測図(S=1/30)

ち込みとして取り扱うこととした。覆土は、灰褐色砂質粘土層1層のみである。

遺物は比較的底部付近からの出土が目立った。須恵器には坏蓋、坏、小瓶等が見られた。24は7世紀末のものと思われる坏蓋で、天井部外面には回転ヘラケズリが施され、ツマミ接合部の同心円型の突起が残存する。25、26は坏で、25は8世紀末から9世紀初頭のもので、底部内面に不整方向のナデが見られる。26は口径推定11.8cmを削り、9世紀初頭に属する。胎土は細やかで良質で、辰口産と見られる。この遺構からはもう1点、甕の胴部の破片で同地産と推測されるものが出土している。27は底径6.0cmに復元される小瓶である。同部下半の破片のみで口頸部は不明だが、徳利形の口縁部が付くものと予想される。また、破片全体に緑灰色の自然釉がかかっているが、これは特別に焼成後の釉のかかり具合を計算にいれて焼かれたものと想像され、当地でも逸品として取り扱われたのではないかと思われる。9世紀後半のものと見られる。

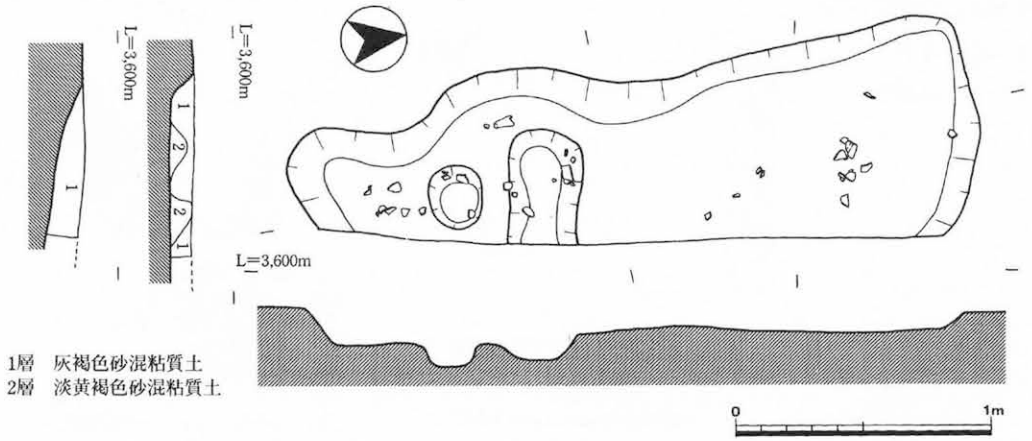
他に、土師器の小片が若干出土している。

1号土坑　Bグリッド南側から検出された。南西側には掘り方が存在し、最深部から北東側へなだらかな傾斜となって地山面に至る。東側部分は攪乱により途切れており、全体の規模・形は不明だが、長径1.20mと推測され、最も深い箇所で9.8cmを測る。

出土遺物には、土師器が若干と須恵器が数点見られた。28は土師器の坏蓋で、口径推定19.0cmを測り、内外面とも赤彩痕が認められる。8世紀後半に属する。29は須恵器の坏蓋で、器高が高く丸みを帯びた器形を呈し、灰褐色の外面は天井部から肩部にかけて回転ヘラケズリ痕が見られる。6世紀のものと思われる。30は台径推定7.4cmを測る小型の須恵器の坏である。台部は外反し内端が接地する。8世紀後半のものとみられる。

2号土坑(第8図)　Cグリッド北側より検出された。東側が攪乱及び調査区域外のため、全体の規模・形は不明だが、検出面上端での長径は2.72m、深さは0.12mを測る。覆土は、灰褐色砂質粘土層に部分的に淡黄褐色砂質粘土層が混入する。柱穴、溝状土坑が重複しているが、前後関係は確認できなかった。

出土遺物は、須恵器の甕の破片1点と土師器片が若干見られた。このうち図化できたものは土師器

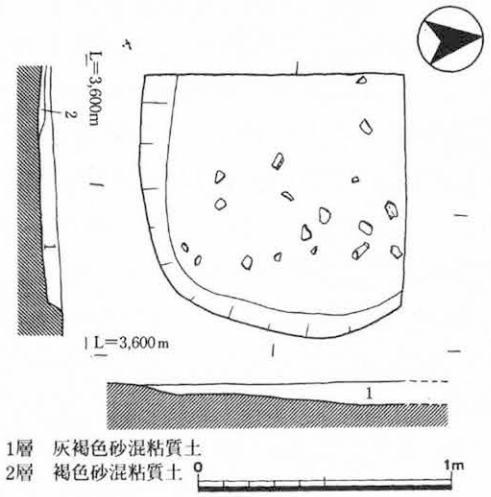


第8図　2号土坑実測図(S=1/30)

2点であった。31は高坏の脚部片、32は有段口縁をもつ甕の口縁部で、口縁帯での剥落が激しく、外面の擬凹線の存在は確認できなかったが、内面の指頭圧痕はかすかに残っていた。

3号土坑(第9図)　Dグリッドに位置するが、北側の一部が攪乱によって、また、西側の一部が調査区域外によって区切られているため正確な規模・形は不明である。検出面上端での規模は1.0m前後で深さ0.1mを測る。土師器の高坏・甕等が数点出土している。

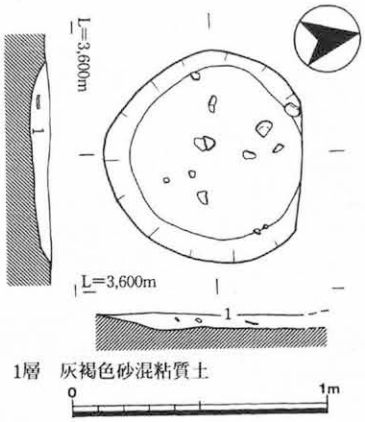
4号土坑(第10図)　Dグリッドに位置する小規模な土坑で、東側の一部が攪乱によって途切れているが、平面形は円形で、上端での規模は径0.85m、深さ7cm前後を測る。土師器の甕等の小片が数点出土している。



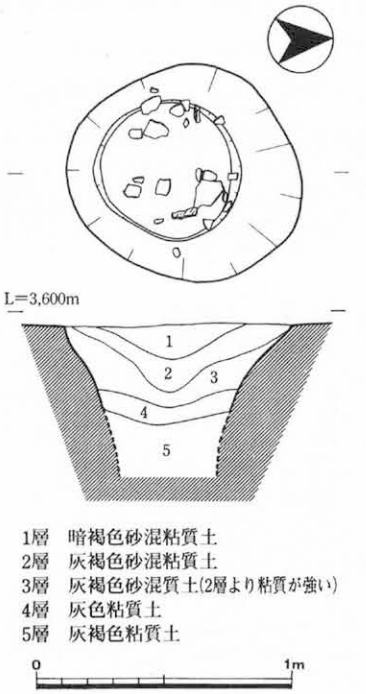
第9図　3号土坑実測図(S=1/30)

5号土坑(第11図)　Hグリッドより検出された。この付近は包含層が存在せず、耕土を除去すると地山面が検出されるため、遺構自体もいくらか削平を受けている可能性がある。平面形は略円形で、径約0.9m、深さは約50cmを測り、灰褐色粘質土層に達している。検出時は土坑としたが、覆土断面の観察などから井戸の可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器を中心に若干見られる。33は、糸切り底の土師器椀である。底径4.1cmを測り、暗褐色を呈し砂粒を多く含む。10世紀頃に属する。34は須恵器の甕で、外面に平行叩き、内面に平行あて具痕が見られる。9世紀末頃のものと思われる。35も須恵器の甕で、外面は黒灰色を呈し平行叩き痕が、内面に同心円あて具痕が見られ、34より年代は遡る。



第10図　4号土坑実測図(S=1/30)



第11図　5号土坑実測図(S=1/30)

包含層その他の遺物

弥生時代末期のものは3点見られる。36は有段口縁に擬凹線が入る甕で、口縁帯内面には指頭圧痕が認められる。胎土は粗砂粒が目立つ。37・38は刻み目の入った突帯をもつ壷で、粗砂粒を多く含む。

古墳時代末期のものには土師器の椀(39)が存在し、底径推定5.5cmを測る。

7世紀後半では須恵器が5点存在する。40は坏蓋で口径推定14.0cmを測る。44～47は坏で、どれも底部から口縁への立ち上がりは、稜を形成しながら緩やかな作りとなっている。44は、底部切り離し部分が外側にはみ出し、やや雑な印象を受ける。胎土には砂粒を少量含む。45も底部の切り離しの仕上げが雑で、処所に突起ができている。内外面とも灰色だが、口縁部外面は黒灰色に変色している。胎土に粗砂粒を少量含む。46は、内外面とも灰色を呈し、底部内面に不整方向のナデが見られる。47は外面が暗灰色、内面が灰色を呈し、底部からの立ち上がりの稜線がはっきりしている。46・47とも、焼成は良好で胎土も非常にきめこまやかであり、辰口産と推定される。

8世紀前期から中期にかけてのものには、48・53・54がある。48は無台坏で、口径13.1cmに復元され、内外面とも暗灰色を呈するが、口縁端部から1.2cmの間は黒灰色に変色している。53・54は有台坏で、53は台部が内端接地し、端部の面が凹んでいる。内外面とも青灰色を呈し焼成は良好だが、胎土に細砂粒が目立つ。54は底部外面に回転ヘラ切りのちナデが認められる。外面は灰色、内面は淡灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

66～69は、8世紀から9世紀前期にかけての甕の胴部である。どれも外面は平行叩きだが、内面については66・67では同心円あて具、68では同心円あて具と平行あて具の併用、69では同心円あて具のちヨコナデが施されている。

8世紀後期から9世紀前期に属する遺物は、年代が確認できるものの中では最も多く見られるものである。図示したものについては、71は土師器で、それ以外は全て須恵器である。坏蓋では41～43がある。41は口径推定16.2cmを測り、天井部外面を回転ヘラケズリしている。口縁端部付近の外面には重ね焼きの跡が見られ、内面には全体に釉がかかっている。42は口径16.4cmに復元され、天井部の器壁が厚い。41同様、口縁端部付近外面に重ね焼きの跡が見られ、内面は口縁端部より約4cmの幅で淡緑色の釉がかかっている。43はつまみ部分のみが残存する。無台坏には49がある。口径推定13.9cmを測り、底面がやや丸みを帯びる。内外面とも灰色を呈し、胎土は少々きめが粗い。有台坏には55～59がある。55は口径推定12.2cm、器高3.9cm、台径推定9.8cmを測る。全体に薄い作りとなっており、口縁端部が外反する。底部は回転ヘラ切りのナデ調整が施されている。外面は暗灰色、内面は灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。56は底径推定9.1cm、57は台径推定8.9cmを測る。ともに内面には使用痕が認められ、台部は幅が広めで外側傾き、内端接地している。58は台径推定7.8cmを測る。焼成は良好で、胎土は細やかである。59は小さめの高台がつき、台径推定7.6cmを測る。内外面とも淡灰色で、胎土にはごくわずかに粗砂粒を含む。焼成は良好で堅い。63は横瓶の口頸部で、口径推定12.9cmを測る。内外面とも黒色の釉がかかっており、口縁端部は外屈させて内側に面取りをしている。71は土師器の椀で、底径推定8.5cmを測る。内外面に赤彩痕が認められる。

須恵器の坏の50・51・60は、９世紀代のものと見られる。50は底径推定7.1cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕が見られる。内外面とも青灰色を呈し、胎土中にごく少量の粗砂粒を含む、51は口径12.4cmに復元され、器肉が薄く口縁部先端をやや外反させながらまるくおさめてある。内外面とも青灰色を呈し、胎土は非常に細やかである。60は有台坏で、台径推定8.9cmを測り、底部には回転ヘラ切り痕が認められる。内外面とも灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み表面がザラザラしている。72は土師器の小型甕の底部破片だが、これも同年代のものである。底径7.0cmを測り、胎土には砂粒を含む。

９世紀後葉に属するものには、須恵器の坏・椀・皿・双耳瓶・平瓦が見られる。52は須恵器の坏で、口径推定11.3cmを測る。口径端部が僅かに外反し、薄く鋭い。焼成は良好で、胎土も細やかであり、高松産と推測される。61は須恵器の椀で台径推定6.8cmを測る。底部に回転ヘラ切り痕が認められる。内外面とも青灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。62は須恵器の有台皿で、底部に糸切り痕が認められる。64・65は須恵器の双耳瓶である。64は口頸部の破片で口径推定12.2cmを測る。口縁端部下方が突出して外面に面を形成し、また、口縁部でさらに外反を強めている。外面は暗灰色で釉がかかっており、内面は淡灰色で暗緑色の釉がまばらに付着している。胎土はやや粗めである。65は体部から底部にかけての破片で底径推定8.7cmを測る。底部外面に焼台の口縁端部が付着しており、体部からその付着部にかけて暗緑色の自然釉がかかっている。体部残存部に４条の沈線が認められる。また内面にも、底部には薄く、体部には斑点状に釉が付着している。70は甕の胴部破片で、外面は平行叩き、内面は平行あて具痕が見られるが、内面のあて具の圧痕は浅いものとなっている。外内面それぞれ灰色・淡灰色を呈する。

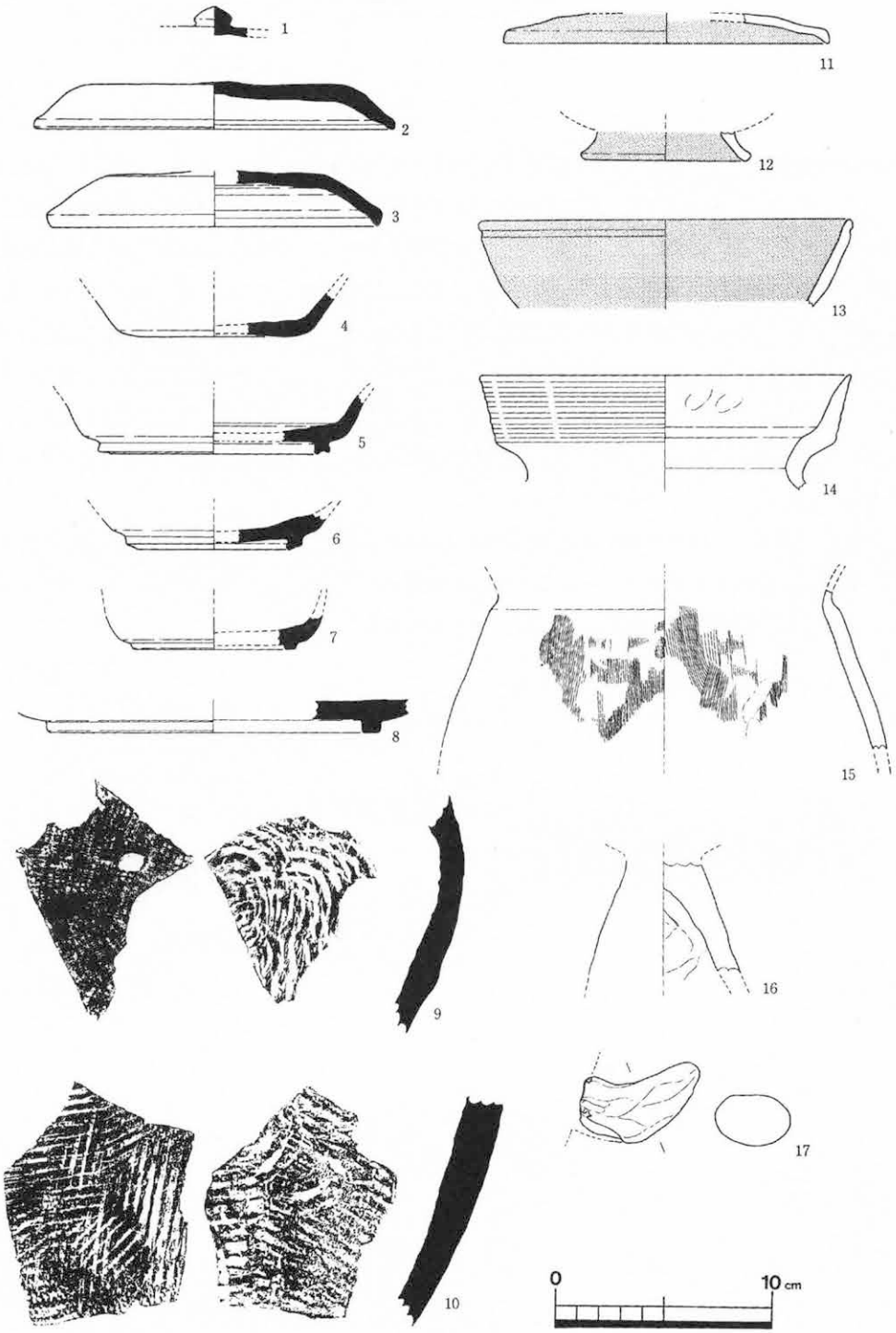
９世紀末から10世紀初頭頃のものと見られる平瓦が１点出土している。76は凸面をヘラケズリし、凹面には布目圧痕が残っている。凸面・狭端面は青灰色、凹面は灰色を呈する。小松南部の戸津産と見られる。

Gグリッド包含層からは緑釉土器の破片が２点出土した。いずれも小片のため詳細は不明である。85は釉調が淡緑色で光沢がある。胎土は灰白色で堅く焼き締まる。86は稜椀で、釉調が明オリーブ灰色、胎土は硬陶で青灰色を呈する。２点とも京都山城産と見られる。

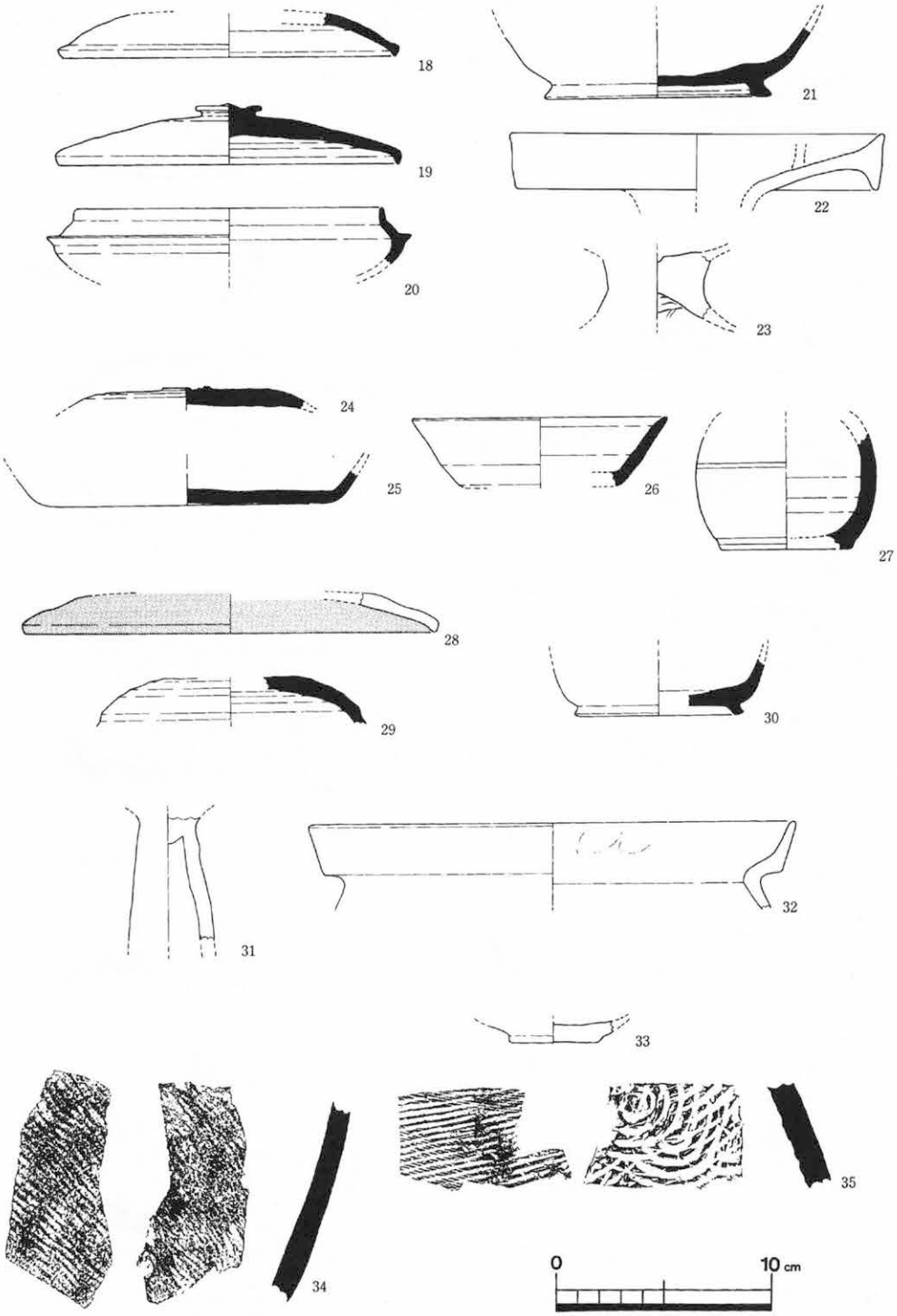
第4章　まとめ

今回の調査では、南側88mについては、旧河道とみられる砂層が拡がるなど、遺構は全く確認されなかった。遺構の密度を見ても、南に進むにつれて遺構数が減少することから、当調査区は遺跡の南辺部ととらえられる。遺構については、地山面が削平を受けているため、溝状遺構・5号土坑以外はどれも10cm前後の深さしか残存していなかった。また、遺物については、耕作土はもちろん、包含層、遺構覆土等から異なった時代のものが混在して出土した。そのため、各遺構とも時期を特定することができなかった。ただ、遺物全体を見た場合、8世紀から10世紀前半のものが圧倒的に多数出土しており、周辺地域の同時期における集落の発展ぶりがうかがえる。さらにごく少数ではあるが、瓦や緑釉土器片の出土から、周辺遺跡の成果と同様に古府台地上が国庁所在地に相応することを裏付ける資料となるであろう。

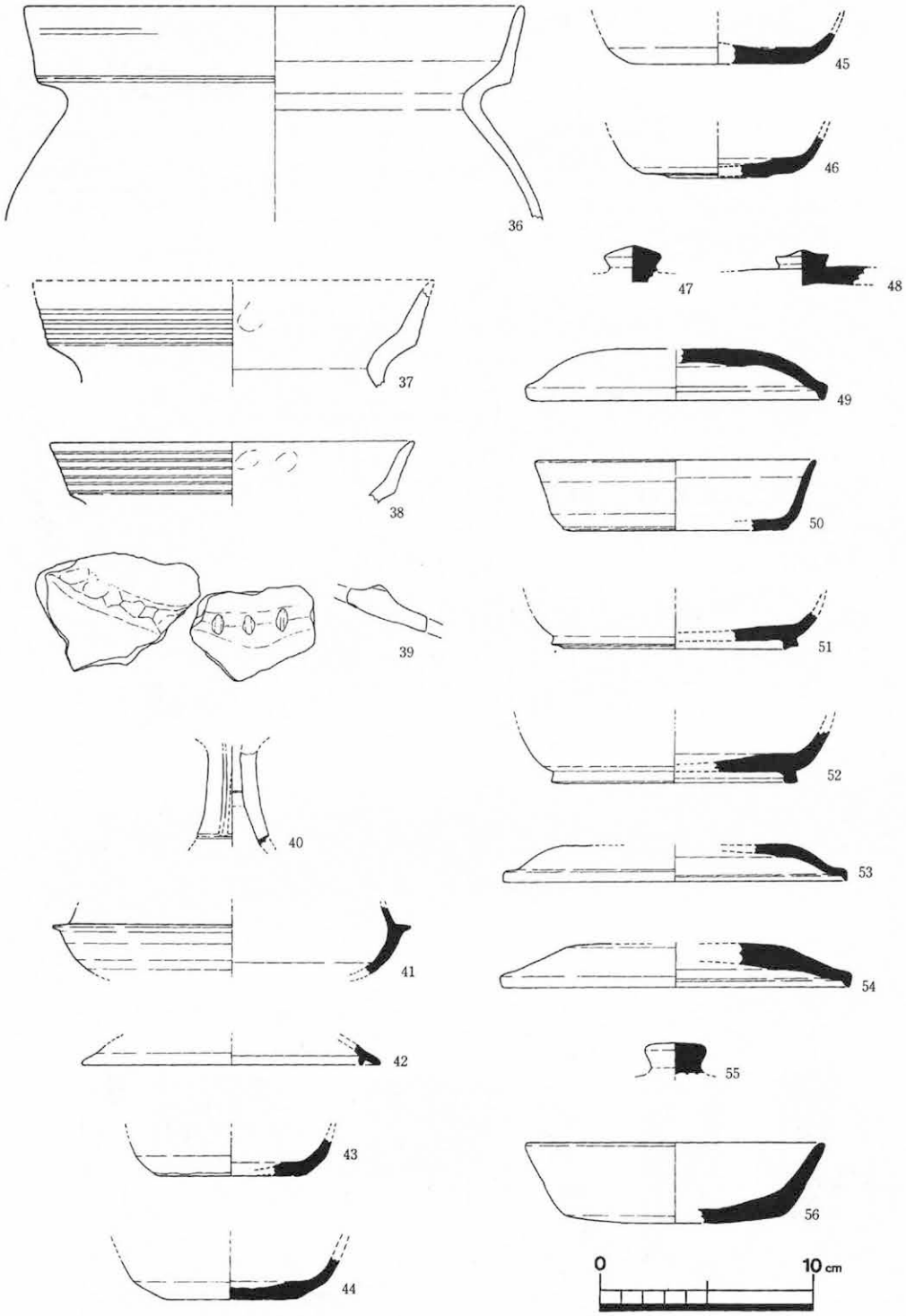
一方、本遺跡が、これまで梯川流域周辺においては検出例が貧弱とされていた、8世紀後半から9世紀中葉の遺物の出土が中心であったことは、梯川周辺遺跡群の動態をとらえるには、今後の調査成果のさらなる集積が必要であることを示していると言える。



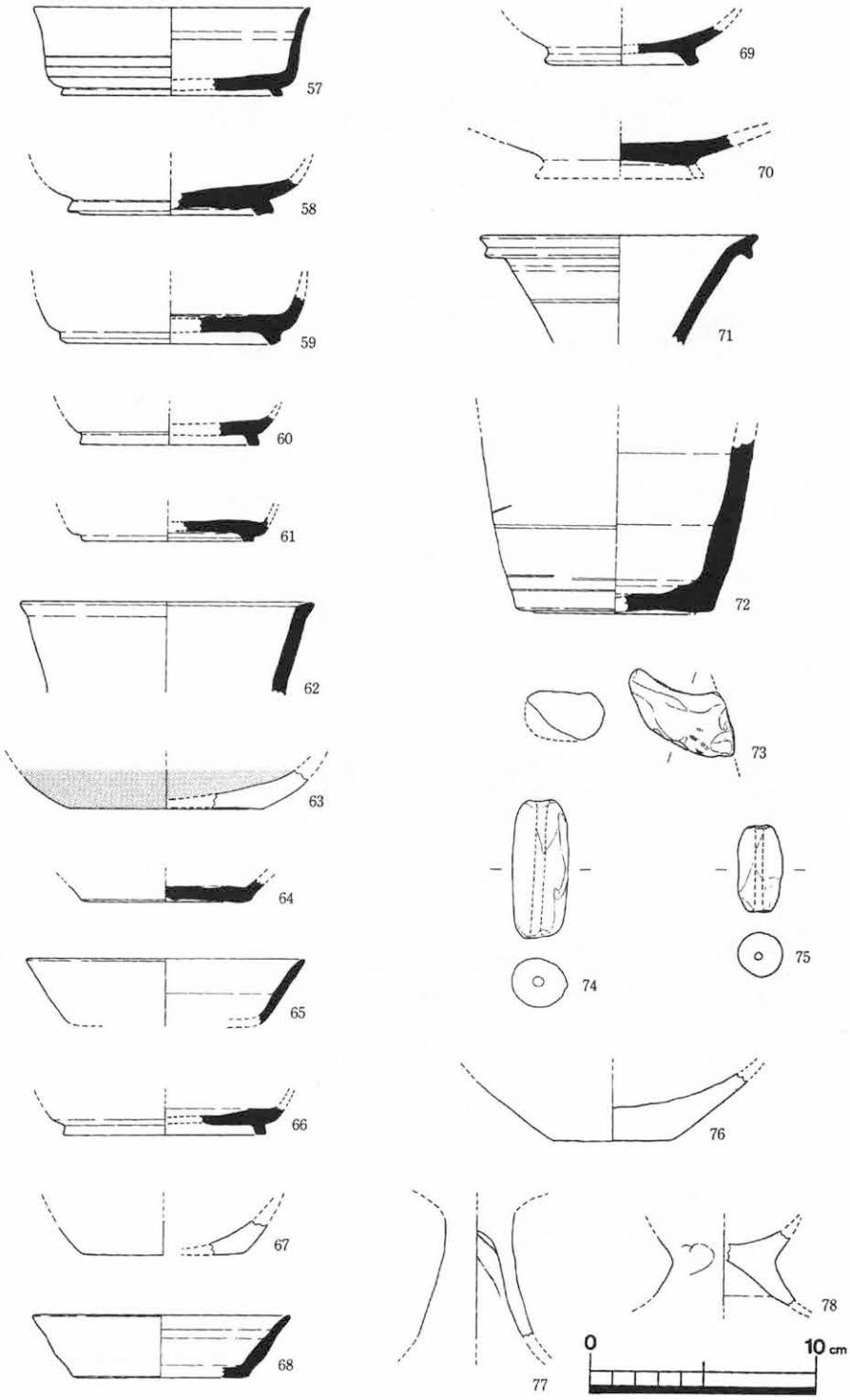
第12図　遺構出土遺物から（S=1/3）



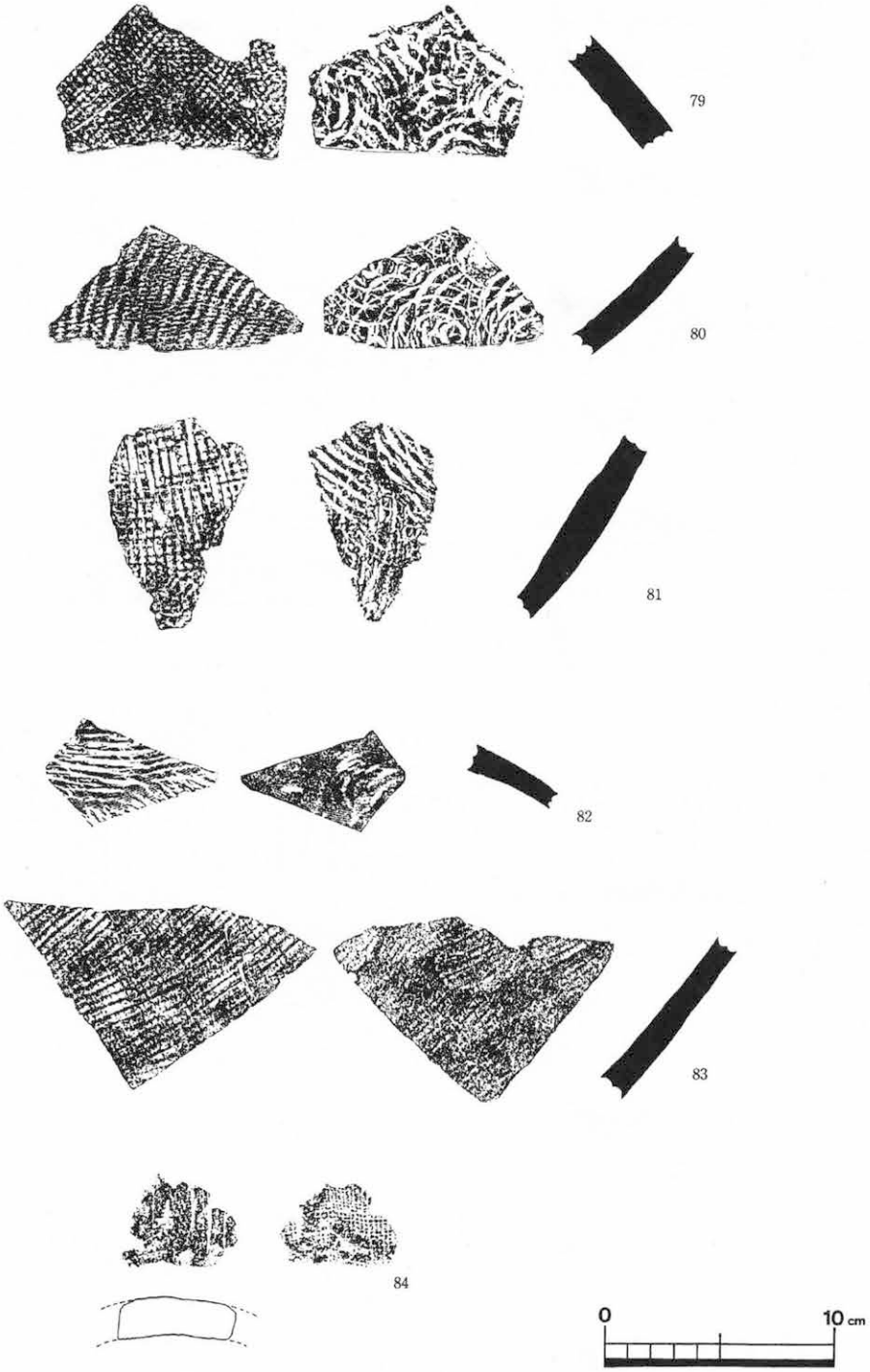
第13図　遺構（竪穴状遺構、1号落ち込み、1号土坑、2号土坑、5号土坑）出土遺物（S=1/3）



第14図　包含層出土遺物①(S=1/3)

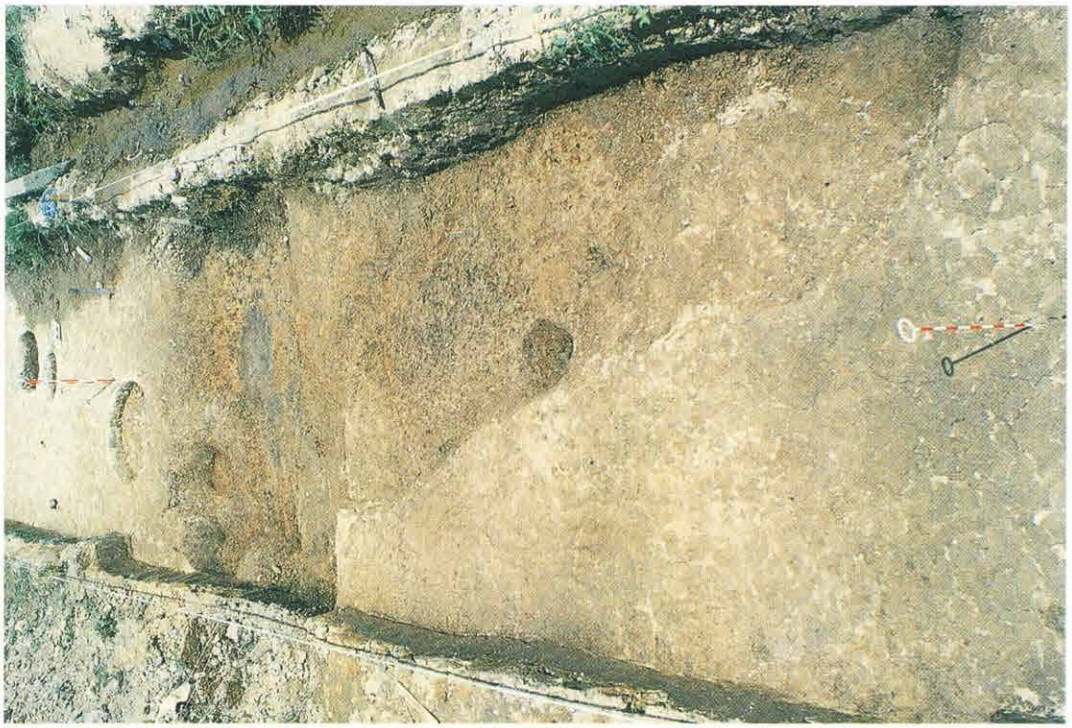


第15図　包含層出土遺物②(S=1/3)



第16図　包含層出土遺物③(S=1/3)

調査前の状況(北より)



竪穴状遺構

図版2

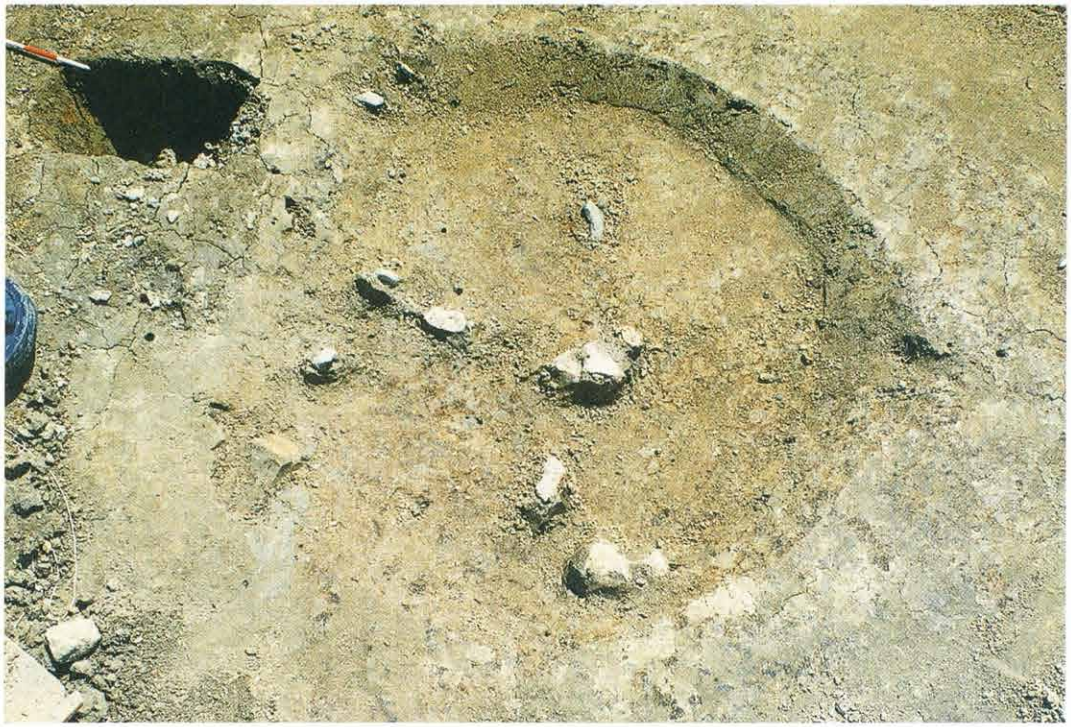
1号落ち込み状遺構

1号土坑

2号土坑

3号土坑

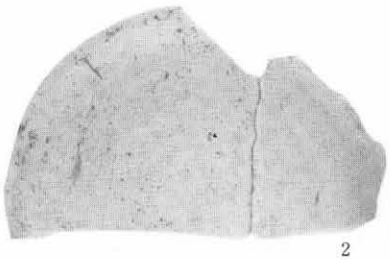
図版4

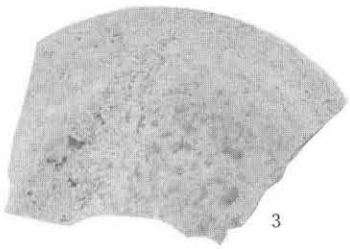


4号土坑

5号土坑

1

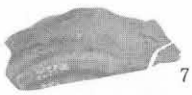

2


3

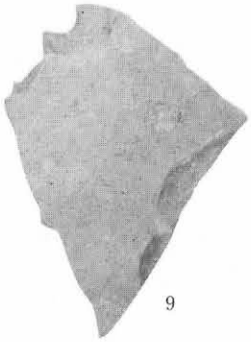
4

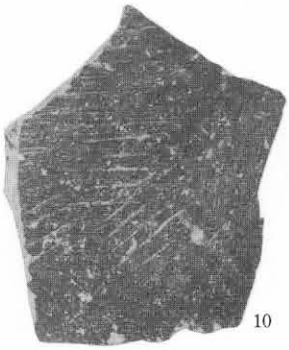
5

6


7

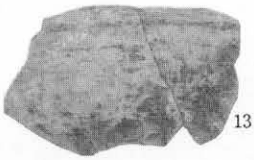
8

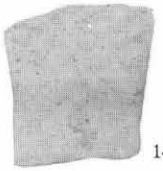

9


10

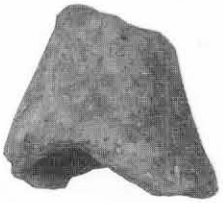
11

12

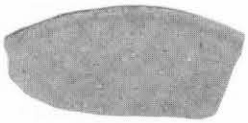

13

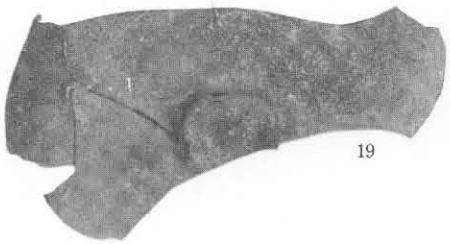

14

15

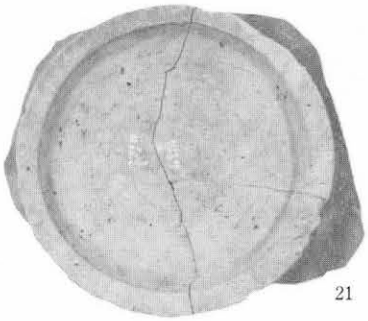

16

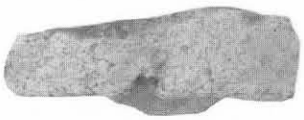
17


18


19

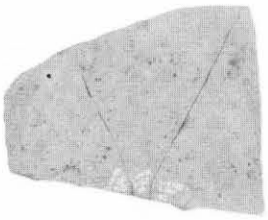
20


21

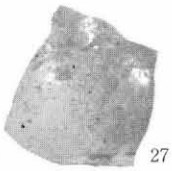

22

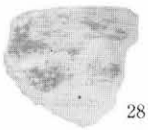
23

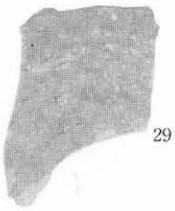
24


25

26

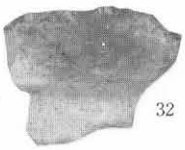

27


28

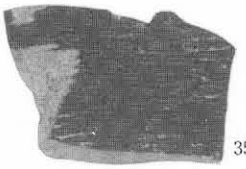

29

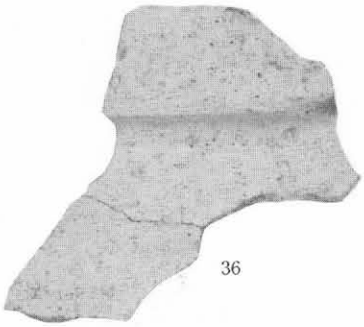
30

31


32

33


35


36

44

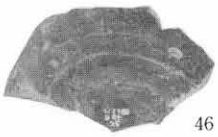
50

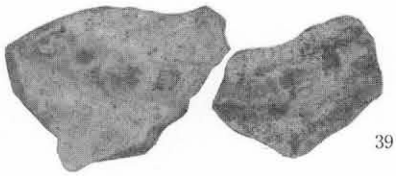
45

51

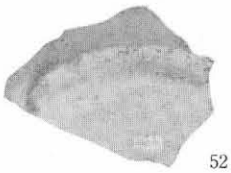
37

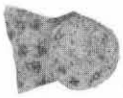
38


46


39

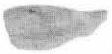
47

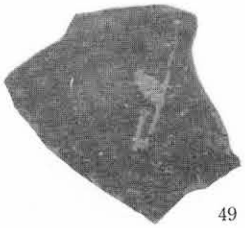

52

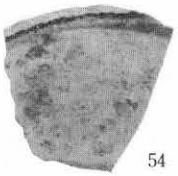

48

53

40


42


49

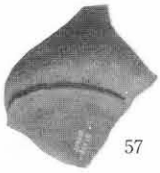

54

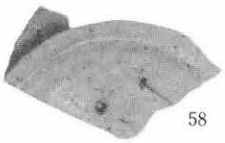
41

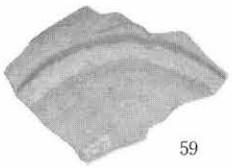
43

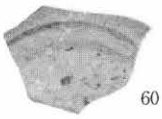
55

56


57

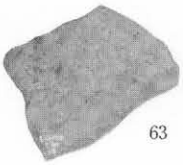

58


59

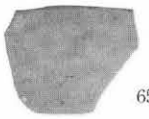

60

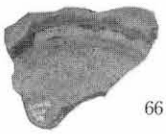
61

62


63

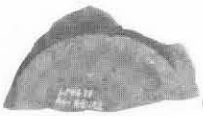
64

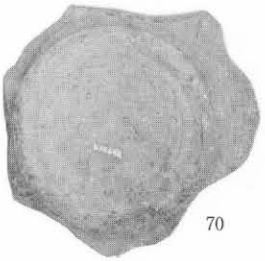

65


66

67

68

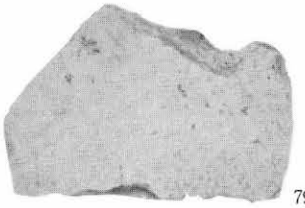

69


70

71

72

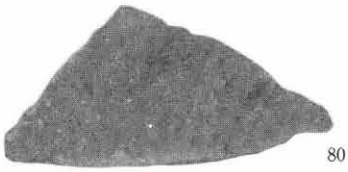
73

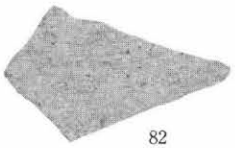

79

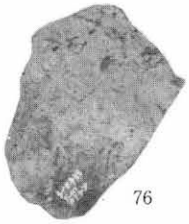
81

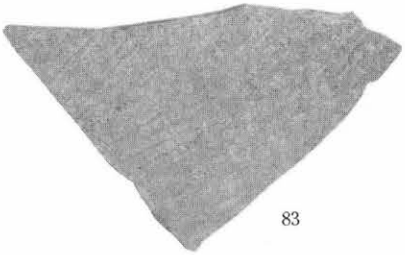
74

75


80

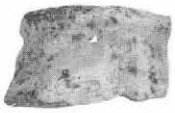

82


76


83

77

84


78

85

86

古府しのまち遺跡

団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書

発行日　平成7年3月31日（1995）

編集・発行　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地

印　刷　有限会社　源田美術印刷